



五人の先哲の一人、林田能寛の生家と言われ、江戸後期から明治時代に建てられた母屋と二つの蔵、離れの補修、復元工事が完了し、「御船街なかギャラリー」として生まれ変わりました。4月20日、落成記念式典が南蔵で行われ、関係者など約70人が参加しました。式典では、山本孝二町長が「街なかギャラリーは、町の芸術文化の拠点として、多くの人たちに開かれたい」と挨拶。工事業者から工事の概要説明などが行われたあと、福味総一郎町商工会長による、林田能寛を物語にした、紙芝居「八勢眼鏡橋物語」が披露されました。式典終了後には、(有)藤木屋プレゼンツ、落語「ごくらくらくご」が開催され、約230人の観客に埋め尽くされた南蔵は笑いの渦に包まれました。夕方から開催された「水の鼓動原酒祭り」では、愛飲家たち約120人が南蔵を訪れ、しほりたての「水の鼓



4月26日、恐竜博物館新館開館式典が行われ、小野泰輔県副知事や姉妹館のモンタナ州立大学附属ロッキーマン博物館のシエルドン・マッカミール館長など、約130人が参加しました。式では、山本孝二町長が「恐竜というテーマを通して、町民とともに成長する博物館を目指していきたい。今後は世界を見据え、大きく羽ばたき、進化する博物館として邁進していきたい」と挨拶を述べました。また、開館のお祝いとして、一昨年に、博物館旧館でクリーニング作業が行われた、モンタナ州産の恐竜化石のレプリカがロッキーマン博物館よりプレゼントされました。式典終了後、御船中学校吹奏楽部による演奏と、御船太鼓「藤蓮」による太鼓が披露されたあと、新館オープンのテープカットが行われました。午後には、町民限定の内覧会が開催され、約1600人が訪れました。

## 御船街なかギャラリー

「動」を品評しました。水の鼓動は、かつて県下第一の酒の名産地として知られた御船の酒を、みふね両岸会、町観光協会や商工会が中心となって、通潤酒造(山都町)の全面協力により、30年ぶりに復活した日本酒です。原料の米と水は御船産にこだわり、今年で5年目の製造になります。



## 恐竜博物館

4月27日のオープンでは、最初の入館者となった、八代市の小学2年生、辻結乃助君へ記念品が贈られたあと、山本町長、岩田重成議長、増永信介館長と一緒に、記念のくす玉割りが行われました。辻君は「去年の45万人の記念セレモニーの時に、45万人目にはなれなかったのが、新館のオープンの時は必ず1番目の入館者になろうと思って7時15分から並びました。1番目に入館できてうれしかったです」と笑顔で話しました。オープン初日には約2600人が博物館を訪れました。

